東方優漢記

一般人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方優漢記

【Ｎコード】
Ｎ３１４７ＢＡ

【作者名】
一般人

【あらすじ】
孤児院を経営していた老人は、何の悔いもなく死んだ…筈だった。目が覚めるとそこは自分の常識が一切通じない、非常識な世界「幻想卿」だった…。
しかも自分の身体は若返っていて、人ではなくなってしまっている。
しかし彼の生き方は変わらない、少しでも孤独を救いたい…そんな優しいおじいちゃんの物語。

終わり即ち始まり（前書き）

初作品で東方とか無謀すぎるだろ.jk

終わり即ち始まり

私という存在は、もうじき消える。
身動き一つ取れないこの身体が、その証だ。
身体を動かすどころか、呼吸という生物が行う当たり前の行動さえ、今の私には難しかった。

ベットの周りには、老若男女大勢の人間が立ち、皆一様に私の顔を覗いている。
皆、私の息子、娘達だ。中には子供…つまりは私の孫に当たる幼い子供もいる。
孫の一人が言った。

「パパ…おじーちゃんしんじゃうの？」

「親父……くっ」

彼は、私が孤児院を開いた時に最初に預かった息子。真っ直ぐで正義感が強い、皆を引っ張ってゆける大人へと育ってくれた。

身体中の感覚がないに等しい、だが、私の心拍を伝える電子音と、皆の話し声はしっかりと聞こえた。

「先生…お父さんは…もう…」

「残念ですが…光太郎（こうたろう）さんの身体は、もう限界です」

「なんとかならえねぇのか！あんた医者だろ！？親父を治せねーのか！？」

末っ子のあの子は、まだ高校生だ。それ故に、いやだからこそ、私の死を受け入れたくないのだろう。
私とて、自分が死ぬなどとは考えたくない。だがこれは生きとし生けるもの全ての定めなのだ。
今この瞬間、命の灯が消えようとしていると時にも死を恐れている。
だが、恐れつつもそれを受け入れなければならない。
それが私にできる最後の教えなのだから。

私は、鉄のように重い喉を動かしながら言った。

「良いんだ」

「親父!?」

「お父さん!」

「私が死ぬ事は絶対に避けられない…それは入院したときからわかっていたさ…だが、悔いは、無い」

目だけを動かし、部屋を見渡す。様々な子供達、強い子、賢い子、優しい子…皆素晴らしい私の家族だ。

「君達に出会い、君達を育て、君達と反発しあい、解り合い、助け合い、家族として愛し合えた…私にとって、これ以上の、幸福は、無い」

だから、安心して逝くことができる。
だから、孤児院を託す事ができる。
だからー感謝できる。

「有り難う…」

その一言を言った瞬間、視界が急に狭まっていった。白い部屋は次第に暗黒へと呑まれていく。
電子音がひときわ大きく鳴り響く、それは、私の人生の終焉を知らせる音だった。

悲しさはある、だが、後悔の気持ちは一切起こらなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ゆっくりと瞼を上げる。目の前には、これでもかという程に緑が生い茂っていた。
木々の放つ清涼感のある独特の臭いが、今現在いる場所が森だということを私に理解させた。
思わず首を傾ける。

（私は死んだ筈では？）

人が死ねば三途の川へと行く、というが私の立っている場所はまごうことなき森。川は有るだろうが、それが三途の川であるということは絶対に有り得ないだろう。こんなに自然の溢れた場所に脱衣婆はいないだろうし…。

（悩んでいても仕方がないか…）

迷ってしまったらまず行動、それが私なりの生き方だ。
とりあえず川を探そうとして…違和感を感じた。
そもそも私の身体は年齢のせいでボロボロの筈だ。それがどういう

ことか、杖なしでは歩くことも出来なかった脚が、自然と前に出たのだ。
いや、脚だけではない、細胞の老化によってシワだらけになっていた筈の皮膚が、棒切れのように細かった腕が、全て抜け落ちてしまった筈の髪が、まるで、まるで時が遡ったかのように、元通りになっていた。

言葉にできない驚愕と共に、私の第二の人生は始まった。

終わり即ち始まり（後書き）

能力とかいまだ未定、早くも打ちきりになりそうな予感

謎の森の青年

幸いにも川はすぐに見つかった。

川の水は非常に澄んでいた、驚きと焦りに満ちた私の顔が、ハッキリと映るほどに。

「なんだ…これは…」

そこに映るのは、間違いなく私だ。

だが、私の年齢は八十を越えている。同室の入院患者から「若く見える」と言われたこともあったが、それでもそれは八十代にしては、という意味だ。

だが、今水面に映し出されている私の姿は、明らかに老人の身体ではない。

「三十…いや、二十を越えた辺りか？一体どうして…」

まるで頭のなかを掻き乱された気分だ。

現状に思考が追い付いていない。

気がつけば、その場にへたりこんでいた。

「一体どういうことなんだ…」

空を見上げて呟く、もちろん返事は帰ってこず、真っ青な空の中を白い雲が通りすぎていった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

自分が子供の作れない身体だと知ったときのショックは大きかった。
孤児であった私は、せめて自分の子供だけは精一杯幸せにしてあげようと思っていたからだ。
それ故に、私は必死になって働いた。
働いて働いて働いて働いて働いてー周囲から社長と呼ばれる頃にはもう三十を過ぎていた。
だが、　そんな私の努力は、担当医師のたった一つの言葉でアッサリと崩れていった。

造精機能障害

精巣が十分な精子を生み出せないことを示す病状。
先天的なものらしいが、私の症状は特に酷く、精液中に一パーセントの精子も見つからなかった。
そして、治す手段は無いそうだ。

無論、私は絶望の淵へと叩き落とされた。
今までの全てが無駄だったと言われたのだ、当然とも言えた。
数日は食べ物が喉を通らなかった。

だが、　すぐに希望が芽生えた。

（作れないなら、引き取ろう）

その日から、私は国中の孤児院や養護施設を巡った。
そして、出来る限り子供を引き取った。

もちろん、周囲からは反対されたが、一切気に止めることはしなかった。

少しでも、孤独を救いたい。

その想いが、私の原動力だった。

子供達とは、最初はあまり上手く接することは出来なかったが、それでも次第に解り会うことができた。

そして少年少女は大人になり、仕事に就き、恋をし、新たな命を産み出してくれた。

幸せだった。

身体は子が作れなくても、私には両手では数えきれない程の息子や娘が出来たのだ。

だから、死ぬことにも一切悔いはなかった。

それなにに私は生きている。しかも若返った姿で、だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ん…む」

意識が覚醒していく、どうやら少し眠っていたらしい。

目の前には相変わらずの青空。時間はそれほど経っていないようだ。

起き上がり水面を見つめる、やはり私の身体は若い頃のままだ。

「これからどうしたものか…」

腕くみをして考える、なにしろ自分が今どこにいるのか、なぜここにいるのか、さっぱり理解できていないのだ。とにかくまずはこの森のような場所を抜けなくては、川の流れに沿っていけばいずれ町につくだろう。

そう考え、私は歩き始めた。

暫く歩き続けると、後ろでガサッと何かが動いた音がした。
思わず振り返って身構えた。
木々の間を縫って出てきたのはない…長身の青年だった。
艶があり、銀にも見える白髪を持ち、眼鏡の奥から金の瞳が覗いていた。青と黒を主体とした特徴的な服を着用じ、首には黒いチョーカーを付けている。

「おや、珍しいね。魔法の森に人がいるなんて」

先に口を開いたのは青年だった。
安堵のため息を漏らしながら、私は聞いた。

「この近辺の人かい？」

「ええまぁ、この森の入り口で古道具屋を営んでいるんだ」

「そうか…人に会えて良かった。もしそちらがよければ町までー」

案内してくれないか。

そう言おうとした時だった。
突如、私の身体が横に吹き飛ばされた。

ガン！

木かなにかにぶつかったのだろうか？凄まじい衝撃に打つちつけられ、ドサリと倒れこんでしまう。

（いったい…何が…？）

さっきまで立っていた場所を見ると、青年が何かと対峙していた。巨大な狼。そう言い表すしかない程の巨体。血走った眼で青年を睨み付けている。よほど興奮しているのか、口からはダラダラと涎が垂れていた。

対する青年は逆に氷のように落ち着いていた。冷ややかな瞳で狼を見つめ、いつ取り出したのか、その手には一本の刀が握られていた。

再び意識が落ちていくなか、私が最後に見たのは狼が青年に飛びかかり、青年が刀を抜き構える光景だった。

謎の森の青年（後書き）

後になって考えたらおじいちゃん気い失いすぎじゃね？

ここは違う世界

見覚えのない天井。
視界一杯に広がる光景に一瞬戸惑ったが、すぐ後に訪れた痛みがそんな思考を吹き飛ばした。
稲妻に貫かれたような、そんな激痛が体中を駆け巡った。

「がッ…ハッ…！」

全身から汗が噴き出る。
そのまま痛みが収まるまで一切の身動きが取れなかった。

「ここ…は…？」

眼だけを動かした辺りを見回す。
小さな個室、和風の今では珍しい畳の部屋。その真ん中にひかれた布団に、私は横になっていた。

―ガラ―

突然襖が開かれる。
そちらに顔を向けるとそこには女の子が立っていた。
黒と白の二色で構成された服、魔女の被るようなとんがり帽子のせいで彼女まで魔法が使えそうな雰囲気だ。女の子は私を見ると、隣まで駆け寄ってきた。

「お！目が覚めたんだな。おーい香霖ー！！お客さん起きたぜー！」

少女がそう叫んでからすぐに、奥からまた一人部屋に入ってきた。

気絶する前に出会った青年だ。
青年はいかにも気怠そうな表情で口を開いた。
「大声を出さないでくれ…久しぶりに運動して疲れてるんだ」
「いっつもここに引き籠ってるからだろ？たまには私みたいに思いっきり体を動かしてだな…」
「ハイハイ、僕は彼と話があるから魔理沙はちょっと店を見ててくれ」
青年のその言葉に少女は頬を膨らましながらも部屋を後にした。
なんというか…まるで兄妹のようだ。
「さて、身体のほうはどうかな、一応応急手当はしたんだが」
「かなり…痛いね」
「それはよかった、生きてる証拠だよ」
「それは…そうとも言えるね」
彼の言った冗談に、少しだけ気持ちが軽くなった気がした。
「まずは自己紹介…かな。僕は森近霖之助（もりちかりんのすけ）ここで古道具屋を営んでいるんだ」
気絶する直前の彼の言葉が浮かぶ。そういえばそんなことを言っていたな。

「あの狼はどうなったんだい？」

「ああ、奴のことなら心配ない。二度と君を襲うことはないよ」

「つまり…」

「殺したよ」

あっさりと衝撃の事実を暴露する霖之助くん。

「よっぽど腹が減っていたんだろうね、こっちの話に一切耳を貸さなかったよ。僕も大人しく喰われるのはまっぴらゴメンだからね」

「君が…あの狼をかい？」

「狼は狼でも、妖狼（ようろう）だけどね」

―妖狼―

初めて耳にする単語に私は首を傾げた。そんな私を見て霖之助くんはふ～むとうなり、顎に手を当てた。

「その反応からすると…君は外来人なのかな？そもそも魔法の森に幻想郷の人間が用があるとは思えないし……とするとまた彼女か？いや結界が緩んだのかそれとも……ブツブツ……」

なにやらいきなり独り言を言い始めた。私自身も色々と質問したいのだが話しかけるタイミングが全く来ない。

「霖之助さーん服の繕いお願いしたいんだけど……ってあら？」

霖之助くんの変貌に呆気にとられていると、また誰かが部屋に入ってきた。
さっきの少女かと思ったが違った、少女であることには変わらなかったが、さっきの少女が黒と白ならこの少女は紅と白を基調とした服だ。部屋の中を覗いたその頭にある紅の大きなリボンが揺れる。

「あら、お客さんいたの？まぁそれはどーでもいいとして…ちょっと霖之助さん聞いてるの？もしもーし」

「イヤまてよ……ブツブツ……となるとこういうことが……しかし実際に……」

「…ていっ！」

―ドゴッ―

「グホッ」

「あ…」

紅白の少女の放ったチョップが霖之助くんの頭を捉えた。
それはもういい音が鳴った。

「霖之助さん！聞いてる？」

「あれ霊夢いたのかい？」

「気づいてなかったのね…まぁいいわハイこれ直しといて今すぐ」

少女から服を受け取り、霖之助くんが渋い顔をする。

「またか…今すぐ、ってそんなに速くは仕上がらないよ。取り敢えずこっちに座り……」

「お茶飲んで待ってるからお願いねー」

ひらひら手を振りながら紅白の少女は部屋を出て行った。
霖之助くんは諦めたように溜息を吐き、私はそんな彼の姿に自然と笑ってしまった。

――――――――――――――――――――。

「つまり…ここは私がいた世界ではないということだね？」

「ああ、ここは『幻想郷』。非常識が常識となる世界さ」

現在部屋には私、霖之助くん、魔理沙ちゃん、霊夢ちゃんの四人がいる。
彼らから伝えられたのは非常に驚くべきモノだった。
私が生きていた世界、そこでは機械や化学が発達して非常に便利な世界だった。しかし技術の進歩の裏で誰にも気づかれずに消えて行ったものもあったのだ。
それは妖怪や神といった伝承や御伽話の中でしかないと信じられていた存在達だ。
それらは人々の信仰や畏れがあってこそ存在できるらしい、しかし人間はしだいに機械を使い、魔法を使わなくなり、神ではなく己が生み出した科学を信じるようになった。
その結果、『幻想』は自分達の存在を守るために小さな国を作り、周囲には強力な結界を張った。
その国は、外の世界とは違い精神や魔法を中心とした独自の文化を

築き上げた。
それこそが『幻想郷』であり、現在私がいる世界なのだそうだ。
世迷言だと言えばそれまでだ、だが不思議なことに私は自¥自然とこの話が本当なのだと受け入れた。
理由はわかっている。私の存在自体が、すでに幻想に近いからだと本能的に理解したからだ。

「それにしても死んだらここにいてしかも若返ってるなんて変だよな、普通は死んだら三途の川を渡るもんだぜ」

三人には私が一度死んだ人間であるということを話した。驚かれはしたものの、「えええっ！？」ではなく「ふーん」といった反応だったが…。

あの時私は確かに死んだ。死んだことを憶えている、というのはおかしな話だが、とにかく死亡したのは確かだ。
心臓が止まり、目の前どころか自分の全てが真っ暗になる感覚。思い出すのは恐ろしいが、あの時の私には一片の悔いもなかったはずだ。

私はお茶を啜る霊夢ちゃんに聞いた。

「私のような…死んでからここに来る者はいるのかい？」

「いるっちゃいるけど…生き返ったり若返ったりするのは無理ね。死んだらそのまま幻想郷で三途の川を渡るわ」

「少なくとも今までそういった現象は起きていないね、僕も無縁塚にはよく行くけど死体が生き返ったところはまだ見てないな」

腕を組んでうなる。ふと窓の外を見ると、夕日が山に隠れ始めているのが見えた。

「とりあえず今日はもう遅いから二人は帰りなさい。女の子が暗くなるまで出かけちゃイカン」

「その意見に賛成だね。霊夢、服は直しておいたから魔理沙を連れてってくれ」

「えー！？もうちょいだけいいだろー？」

「文句言わないの…それじゃあね霖之助さん。それと…名前なんだったかしら？」

「光太郎だよ。神谷光太郎（かみやこうたろう）」

「そ、またね光太郎さん」

「じゃーな光太郎！」

元気よく駆け出していく少女二人。それを手を振って見送った。
急に静かになった部屋で霖之助くんに言った。

「元気で良い子たちだね」

「少々元気すぎるけどね、まぁいまさら腐れ縁は切れないさ」

その後、身体に痛みを、心に少々の期待を持ちながら私は眠りについた。

名を変え、生きていく

さて、次の日から私の日常は大きく変わっていくことになったのだが……まず初めに私が人間でなくなっていたことが判明した。
目覚めると昨日までの痛みが嘘のように引いていたのだ。それはもうしっかりはっきりすっきりと。
不気味に思って霖之助くんに相談したところ、驚きの返答が返ってきた。

『おやこれは……人じゃなくなってるね』

『はい？』

なんでも霖之助くん曰く、昨日は感じなかった力を私から感じるらしい。
とにかく専門家に診てもらおうということになり、やってきた専門家は……霊夢ちゃんだった。
霊夢ちゃんは巫女をやっているらしく、こういうこと（ありえないこと）に精通しているらしい。そして調べてもらった結果――。

『結果から言えば光太郎さんの身体は人間じゃなくなっているわ、だから怪我の治りも早いしよっぽどのことじゃ死ななくなってるわ多分老いもこないんじゃないかしら』

『ほ、本当なのかい？』

『嘘言ってもしょうがないわよ。でもわからないことが一つだけあるわ』

『わからないこと？いったいなんなんだい？』

『人じゃない何かのは確か、でもその何かがわからないのよ』

『ええと……つまり？』

『幻想郷にはいろんな奴等が住んでるのよ。天狗や河童みたいな妖怪はもちろん、魔法使い、妖精、幽霊、神から悪魔までそれこそ世界中のありとあらゆる幻想がこの世界にいるの。でも光太郎さんから感じる力はそのどれにもあてはまらないのよ、少なくとも私の知る範囲ではね』

『だとしたら……私はいったい……』

急に自分自身が何なのかわからなくなる、その時の私とってその事実はとても恐ろしいものだった。

しかし、そんな私の恐怖は霊夢ちゃんの一言でアッサリと消え去った。

『気にしなくていいんじゃない？光太郎さんは光太郎さんなんでしょ？』

彼女にとっては何気ない一言だったのかもしれない。だが、その言葉を聞いた瞬間、今までの記憶が走馬灯のように駆け巡った。

親の顔も知らず孤児として生まれ、自分の子だけは絶対に幸せにして見せると誓い勉学に励み一流企業に入社、入社直後からひたすら働き続けた。

私の功績は認められ、気がつけば社長という座に就いた、そしていざ子供を作ろうとしたときに知らされた報告。

私を絶望のどん底へと叩き落とした診察結果。だがそれでも私は諦めなかった。
自分と同じく孤独に蝕まれた子供達、今度はその子供達を一人でも多く救いたいと願った。
一人目を引き取り子育ての難しさを知り、二人目を引き取り子供同士の喧嘩を仲裁し、三人目を引き取り子供にも悩みがあることを知った。
私財をなげうってひたすら子供を引き取り続け、十人目を迎えた頃には自分の孤児院『ひまわり』を所持していた。

私は孤独が恐ろしかった。
誰にも知られず、誰にも話しかけられず、誰にも自分という存在を認知してもらえない。
その恐ろしさを知っているからこそ、この気持ちを子供に味わってほしくなかったのだ。

偽善者だと言う者もいた、まったくもってその通りだ。
私はただの寂しがり屋だ、私が行っているのはただの好意の押し付けに過ぎない。自分への嫌悪感に押し潰されそうな時もあった
だが子供達は……そんな私に感謝してくれた。

『親父…有り難う』

『お父さん……有り難う』

『有り難うな……父さん』

その言葉が、どれ程の力になったか！
その笑顔が、どれ程の助けになったか！
そうだ、私は偽善者だ！血の繋がりのない他人に金を使うような愚

か者だ！
それで構わん！それこそが私、神谷光太郎だ！！
その生き方は変わらないこれまでも、そしてこれからも！

『あ…あぁ……あああああああ！！！』

気がつけば全力で泣いていた。
突然泣き出した私に驚いた霊夢ちゃんや霖之助くんが駆け寄ってきたが、そんなことも一切気に留めずに私は泣き続けた。
頬を伝う涙は熱く、その一つ一つに私が知らぬうちに溜め込んでいた恐れや戸惑いを宿していた。

『あああああぁぁぁぁ！！！』

だから私は、ただ只管に泣き続けた。

――――――――――――。

自分の中の負を一通り吐き出した後、これからどうやって生きていくかという話になった。
なにしろ私はこの世界では余所者なのだ、こちらで生きていくための知識など一切無い。
しかしこの悩みは以外にアッサリ解決した。

『それなら香霖堂（ここ）で働くといい』

霖之助くんが言うには香霖堂では私がいた世界の道具も置いてあるらしい。しかし霖之助くんには『名前と用途』しかわからないらしく、肝心の『使い方』はわからないというのだ。
そこまでわかっているのに何故？と疑問を投げかけたところ、霖之

助くん自身の力が『未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力』だからだそうだ。ちなみに霖之助くんは妖怪と人間のハーフらしい。
そこで私に今まで集めたあちらの道具の使い方を教わるついでにこの店の従業員として住み込みで働いてほしいとのことだ。
断る理由などあるはずもなく、私はその提案を喜んで受け入れた。

さて就職先と寝床が一気に決まったのだがまだまだ問題は山積みだった。
次に私の前に立ちふさがったのは自分の身をどう守るかという課題だった。
妖怪と人間が共存する幻想郷でもその社会の在り方の奥底には弱肉強食という自然的な掟があった。
弱者は強者に虐げられる。
私がこの世界に来て初めての出来事。そう、妖狼に襲われ、霖之助くんに救われたあの事件だ。
頻繁に、というわけではないが幻想郷ではあのような事件がよく起こっているのだと霊夢ちゃんは言う。
妖怪は人を襲い、人は妖怪を退治する。現代日本ではなくなった営みがここ幻想郷では行われていた。
それはさておき、問題は私が自衛の手段を全く持っていないということだった。

『えー、光太郎は空飛べないのか？』

『魔理沙ちゃん、向こうの人は生身で空を飛んだりはしないんだよ』

『じゃぁ私が鍛えてやるぜ！』

『本当かい？それじゃぁお言葉に甘えさせてもらうよ』

『おう！魔理沙先生にまかせとけ！』

この後、いきなり巨大レーザーを撃ち込まれてまた泣きそうになった。

女性や子供同士なら『スペルカードルール』という射撃ゲームで勝敗を決めるらしいが、それは女子供の遊びとして大人の男性には浸透していないらしい。

とにもかくにも頼もしくも可愛らしくそれでいて手加減を知らない魔理沙先生は私が自分の身を守れるようになるまで私を特訓してくれることとなった。

ちなみに霊夢ちゃんは幻想郷の結界の管理者らしく、外の世界から迷い込んだ人間を外の世界に返す役目もおっているのだそうだ。そして、一応務めだからと言って、私に外に帰る気があるか確かめてきた。そしてもし帰る気なら外に出してあげると。

その問いを、私はスッパリ断った。

『私はあちらではもう死んだ身だ、死人がいつまでもいてはいけないだろう？それに私はこの世界を見てみたいと思うんだ、この非常識が常識となっている世界をね』

霊夢ちゃんは『そう』とだけ答えて、そのまま何も言わなくなった。

そして、新しい人生を開始するために私は名を変えた。といっても気持ち的な問題なのでたいして変えてはいない『朗』を抜き取り、私は光太と名乗ることにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3147ba/

東方優漢記

2012年1月9日22時52分発行